

巻頭言

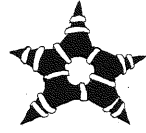
助けよう 孤立する母親たち

岸井 勇雄

子どもを「操作」できないいちだち

ある病院で、怪我をして受診する子どもの数が増えた。ある子どもは何度も同じような傷で連れて来られ、母親は階段から落ちたというのだが、どうもそのような怪我とは思えないので、医師がゆっくり話を聞いて心を開いてもらったところ、私がやりましたとわが子への虐待を打ち明けたという。そこで医師は、これはこの人に限らないと、多くのカルテを点検して疑わしい場合を取り出し、保護者に電話をかけた。





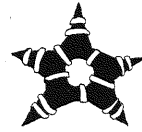
「その後いかがですか。体のことばかりでなく心のことも親子のことでも、何でも気軽に相談してください」と、いわば幼児虐待一一〇番を開設したところ、次々に告白する親が出た。

医師の指導のもとにこうした母親たちのサークルができ、その場面がテレビで放送されたことがある。顔はモザイクに、声はオクターブを変えてプライバシーが守られていたが、話の内容はきわめて率直に、現代の若い母親の置かれている状況を物語るものだった。

最初に発言した人が「私が子どもにこんなことをしてしまう原因をよく考えてみたら、子どもが生まれる時にマニュアルをもつて来なかったからだ」と気が付いたんです」と言うではないか。私は、なるほど、そういう時代なのだと思った。

いまや私たちは、電化製品やパソコンなど、機械に囲まれて生活している。これらはすべてマニュアル（取り扱い説明書）通りにやらなければ動かない。また、マニュアル通りにすれば必ず操作できるのである。こういう中に生まれた若い母親たちは、わが子を生んで、それをどう扱ったらいいのかわからないのだ。

この発言を受けた人が、「そうでしょ、だから私、本屋さんへ行つて育児書を買ったんです。だけど、書いてある通りにいけないんですよ」と言う。私も類書（最近で



は『子育て小事典―保育のキーワード』(エイデル研究所刊)を書いているので、それはそうだろうと思った。どんなに多くの実例を挙げても、それは一例ずつに過ぎない。そこに書かれている理論と実例を参考にして、自分と子どもとの間で工夫していただかなければ、と。

ところがその人の言うのはもっと極端なのだ。「育児書に、幼い子どもは夜九時には寝かせなさいと書いてあったので、九時まで待って、九時よ、寝なさい、というのに寝ないんですよ。私が、頭へ来て突きとばしてしまっただけです」。

この番組の最後に、心理学者のコメントがあった。それは、この母親たちに共通するのは、幼い時から課題を与えられ、その解き方を教えられ、それに忠実に従って次々と課題をこなしてきた高学歴の専業主婦です、と。自分の子をもつて、初めてどうしていいかわからなくなつてパニックを起しているという分析だった。

幼い時から決められた課題とその解き方を教え込まれ、自分で問題を解決する力が育っていないという指摘は正しい。その上に私は、いまの親たちの子どもと接した体験の不足や欠落が直接の原因だと考える。長い間非常勤で保育原理を教えたある大学で、保育科の学生二五〇人にたずねたところ、幼児と遊んだことのある人一三〇人はまだいいとして、赤ちゃんを抱いたことのある人はわずか五人だった。



母親を中心にして、みんなで子育てを

参政権も与えられずに差別をされていた昔の女性の方が、法的に同権になった現在の女性よりも恵まれていたという事実がある。

まず大家族で共働き、いわば老若男女共同参画社会だったということである。農家はもとより、家内工業も商店も専業主婦などは存在せず、家族総出で働いていた。隣近所の交流もブライバシーがないくらいに盛んで、主婦が身ごもると、お前さんは身重なんだから無理しちゃいけないよと助けられる。出産もみんなの手を借りて済まし、産後の肥立ちが大事だよといったわられながら職場復帰。小さい時から弟妹の世話をし、近所の赤ちゃんのお守りもし、子育て中の親子の間柄も見なれている。年寄りからいろいろ教わることもでき、それだけに苦勞な面ももちろんあったが、みんなで子育てをすることができた。

子どもも幸せだった。忙しい大人たちに見守られながら、過保護も過干渉もなく、近隣の子どもたちと遊び回り、幼少年期にふさわしい生活を体験することができた。神社の境内で遊んだ時、自分を含め男の子たちも赤ん坊を背負っていたことを覚えている。

これに比べて、マンションの一室で子どもと向かい合い、社会と断絶したいまの母



親が育児ノイローゼになるのはやむを得ないことも知れない。特にすべては人工的に操作すべきものという体験ばかり積み重ねてきた現代の親にとって、いのちあるものを育てることの困難さ、特に予期に反する子どもの反応の複雑さは耐えがたいものがあるに違いない。

「自ら育つものを育てせようとする。それが育ての心である」「教育は育つものに対する信仰である」——これは本誌の編集主幹もなさった倉橋惣三先生の言葉である。

フレールが言うように「子どもの中に、かすかながら全面的に活動している生命に、全面的に、しかもひそかについていきながら」折りあるごとにそれを強めていく子育ての喜び。

これを理解するためには心のゆとりが必要である。母親一人に子育ての責任を負わせるのをやめ、家庭も地域も園も一緒になって母親を中心としながらみんなで子育てをし、その苦勞も喜びも分かち合う方向へ進まなければならないと切に思う。

(県立新潟女子短期大学)